方法論の旅

藤原与一

一、外国での——

私は、これまでのいくどかの外国行きも、方法論の旅としました。

外国語といっても、私にいくらか話せるのは、英語だけです。ところが、これを聞く耳は、まったく弱いのです。こういう私が、あえて外国に行くのは、自分の視野と経験とを広めたいからです。私は私なりに、なんとかして、自己の関与するすべてのものの新しい統一をはかりたく思います。このためには、あえて外国に出むくことも、私の重要事となります。

限って申しますと、私は、純正な言語学を求めて、よその国にも出てみようとしてきたのでした。

聞く力のごく弱い私として、注意すべきは、つぎのことであると考えてきました。一つ、対者の言をできるだけ静かに受けとめること。二つ、念を入れて問いかえすこと。三つ、理解し得たところで、できるだけ静かにものを言うこと。

1　英国での経験

昭和四〇年、英国のリーズ大学でのことです。そこの方言研究所を見学することができました。大きな調査がしあがってい

ました。所のかたは、調査の概要を語って、つぎのことも述べました。〝この調査では、だれそれ君が、ぬきんでてよくやってくれた。多くのしごとをしてくれた。〟と。私は、いきおい、複数の調査者にあっての、調査者の質、あるいは調査能力の均質を問題にせざるを得ませんでした。

期間の問題もありました。先方は、十年くらいかかるのは問題でないと言いました。私は、もっと短いほうがよいのではないでしょうかと述べました。

『瀬戸内海言語図巻』のために、調査期間をきびしく圧縮し得たこと、均質的調査能力の人たちのそろった調査活動を得たことは、私どもの特色であります。

リーズ大学での、以上の会談では、私は、方法論的な啓示を得ることができませんでした。

2　ベルギーでの経験

やはり昭和四〇年、この国の研究所では、多色の用いられた、美麗な言語地図を見学することができました。その地図製作の、念の入れかたの周密なのには、驚かされました。

しかし、その時、私はつよく思ったことです。めったに、このような方向に行ってはならないぞ、と。第一、符号の複雑と、用色の複雑とのかけ合わされるところにおこされるべき体系的整頓が、私には、至難のことと思われました。

さてまた、言語地理学のしごとでは、基本段階の資料採択の厳密こそ肝要だと、これは、一人がってに、また、つよく思ったことでした。

3　アメリカのエール大学で

また昭和四〇年、エール大学で、私は、ベルナール・ブロックさんに会うことができました。最初から、私は、きびしいかただなと感じました。〝自分のところで研究するのがいちばんつまらない。〟というようなおことばが出ました。米国内の言語学潮流の諸相を睥睨するおもむきが、これにうかがわれました。私は、しぜんに、方法論的示唆を受けはじめたのでした。会談のおわりのところです。氏は、こう言われました。〝ニューイングランドの言語地図を見たか？　三〇年前は言語地理学がさかんだったが、その後は、こうした研究が、見えなくなった。(disappeared) I don't know why.〟私は、〝「I don't know why.」を記憶してお別れいたします。〟と述べておいとましたのでした。私は、今も思うのです。「I don't know why.」と言われたブロックさんの、言語学に対する方法論的なきびしさを。

4　同じ年アメリカ西岸で

また、一人の言語学者に会いました。その人が、ヨーロッパの言語研究を批評して、〝古い方法で〟と言ったので、私は、やや積極的に、つぎの二つのことを述べてみました。シンタクティカル・メソッドが重要であること。比較のためのダイメンションが重要であること。二人に、この時、すぐの意見合致がありました。

この言語学者は、つぎのような研究テーマを持っていました。

日本人の二世・三世について、言語比較をすること。スペイン人の二世・三世について、言語比較をすること。ロシア人の……。

言語の世代変化の追跡。(→変化の遅速、ものの消失・不消失)

世代変化を追跡することが、この人の研究目的でした。

昭和四〇年、この時、私は、社会学的方法の重視すべきを、大いに教えられました。今日の、社会言語学ばやりとでも言え

そうなものを見るにつけても、私には、今昔の感にたえないものがあります。なにぶんにも、社会言語学を、全言語学の中に、正しく位置づけることがだいじなのではないでしょうか。

5　カナダのトロント大学で

これは、昭和五九年のことです。

言語学科の大学院で申し述べたことの最後に、「方法論について」があります。この中で、私は、年来の主張、「自然傍受法」に触れるところがありました。思いもかけないことに、臨席の一教授の、つよい共鳴がありました。フィールド・ワークの書物も書いていられるとか。アフリカにも出向く人だということが、のちにわかりました。私は、うれしくなりまして、その教授をもつよく意識しつつ、すべての人に、「自然傍受法」は、どのように英訳したらいいでしょう、とたずねました。

――知友のリチャード教授が、通訳してくれます。結局、先の教授が、

Natural Empathetic-Receptivity Theory

との訳を教示してくれました。

私が感銘してやまない、この英語術語の与えられたところには、たしかに、双方の方法論的な共感がありましょう。

二、日本での――

私は、方言調査の旅行をします。方言を教わる旅をします。

これは、私には、そのまま、言語研究の方法論の旅になります。言語とは何か。人間が言語によって生きるとはどういうこ

とか。言語は、どのように奥深いものなのか。こういったことが、つねに問題になります。私を動かしてやみません。

方言という言語現実態に対応すると、私は、何もかも、根本から考えさせられてやまないのです。

けっきょく、ことばに生きる人間、その相手がたの心に、多少ともはいっていかなくては、私は、方言を知ること（調査すること）ができません。私は、方法論上のきびしい鞭を受けるのです。

自然傍受法などということも、じつに、このさかいにあって、体得させられたものであります。

近来、私の胸中にしきりと往来するのは、環境としての言語ということです。

私どもが言語生活をしているということは、対人関係を見て言えば、「言語環境の中に住している。」ということでしょう。言語は、他者を予想する私の生活にとっては、環境言語とも言いうるものであります。そういえば、今まで、言語地理学と言ってきたものも、その地理学と考えられるものが、まさに環境地理学と考えられます。言語地理学は、言語環境地理学と見ることができましょう。

私自身の生長した瀬戸内海中部の一島、ここから目を広げてしぜんに得た自分の生活環境の瀬戸内海域は、私に、言語環境を考えさせるにいたった基本領域です。自己の瀬戸内海域を熟視すればするほど、私は、言語環境・言語環境地理学・環境言語学を思わないではいられないのであります。

ここに、私なりの一つの方法論的開拓があったと言えましょうか。

三、座業での——

文化人類学は、私に、異文化を見る心を養ってくれました。——方法論の広い旅ができました。

平櫛田中先生が、百歳を過ぎて、なお、三〇年分の木材を確保せられたという事実は、私に、研究の無限たるべきを教えてやまないものでした。先生は、私にとっても、たいせつな、方法論の恩師です。

熊谷守一画伯、私の尊敬してやまない人です。その画集にある単色の丸や三角の絵、そういうものを見ていると、絵のさっぱりわからない私が、なにかしら醇乎とした刺激を受けるのです。学問の質も、結局、こうならなくてはならないのかと考えさせられるのです。方法論的示唆の大きいことが思われます。

一つのピアノ演奏会でのことです。（座して私は聴きました。座業。）

壇上の演者が、心で弾きます。

音を迎えにいきます。

あるいははげしく、

あるいは静かに。

とぎすまされた知性！

演者一人がいます。

その手が、

手だけの世界を創ります。

心のピアニスト。

端正なピアニスト。

彼は鍵盤を見ませんでした。

私は、方法論のよい旅をしました。

言語は、いずれも、生きて動いているものでしょう。将来に向かって発展していくものでしょう。——発展していくはずのものと考えることが、必要なのでしょう。とすると、言語学には、つねに、高次元の共時論の立場が入用であります。この、発展的な立場がいると考えられます。

高次共時論は、言語の体系的存在の無限の発展に、つねに関わっていきます。

このゆえにまた、言語学での高次共時論は、言語生活論とも言ってみることができましょう。

私は、こうなって、言語学は、いよいよ純粋なものになると考えたいのです。

四、方法論不在

日本人学生に対する外国語教育が、こともなく、「読んで訳」「読んで訳」式におこなわれるのは、方法論の不在を言わしめるものでありましょう。国語史研究が、要素論的にのみおこなわれるのならば、これも、国語史研究での、方法論不在と言えましょうか。国語史も、生活史にほかなりません。要素論的方法の止揚が必要であります。

研究界に、批評の名での感想があります。それは、しばしば、批評の暴力ともなっていましょう。批評での、方法論の不在であります。

学を語って学理念の不鮮明なのは、方法論の欠如にほかなりますまい。研究上、部門別のおこなわれる時、そこに総合の見識がはたらかなければ、ことは、方法論の不在とされます。

言語状態、あるいは言語状況について、一つの特色が指摘されるとしますか。その特色が、その状態なり状況なりの特性ないしは特質であるかどうかを考えるのは、まさに方法論的配慮とされます。

旧時ですが、私に、つぎの経験があります。東条操先生編『日本方言学』の時、課されて私は、文法を担任しました。この時、私が考えたのは、自分の研究発表をということでした。自己の探究し得た資料に基づいて、ものを述べるということでした。私は、研究発表というものは、そういうものでなくてはならないのであろうと考えたしだいです。

この時、私に、すくなくとも、無自覚的な「方法論の芽生え」はあったのだとされるように思われます。

方法論とは何でしょうか。ここで、あらためて、定義を試みてみます。

方法論とは、

問題・主題・研究テーマごとに、対象世界の本質の認識につとめて（本質を追求して）、方法発始・方法考察・方法適用の根拠を見つめようとするもの。

と言いあらわしてはどうでしょうか。

方法論は、まさに普遍的なものに相違ありません。

五、方法への懐疑　方法論の旅

私は、つねに新規に生きようとしています。――はかない努力ではありますけれども。新しくなりたい、新しくありたい、と思うことが切です。

なんとかして、ものを作っていきたく思います。学を創造していきたく思います。

このため、つねに、方法への懐疑を重んじます。方法の超克を重んじます。

そうすることが、私の「方法論の旅」です。

研究は、つまるところ、方法論の旅を旨としていくものではないでしょうか。

この旅の中で、方法論が目的論を喚びます。

（広島方言研究所）